

「まちやど」から考える地域の魅力と住民文化

コロナ禍で、遠距離移動や密を回避する行動様式が浸透したことにより、生活様式のみならず観光のスタイルも随分と変化している。そのような中、地方の遊休資産や既存資源を活用した取り組みが増えている。バブル期にリゾート開発を中心に大規模な設備投資を伴う観光振興策が展開されたが、足元では、小規模であるが温かみを感じられる丁寧な「おもてなし」がむしろ志向されている。その中で、近年「まちやど」という取り組みが登場している。

「まちやど」とは、まちを一つの宿と見立て、エリア内の空き家等を改修し「客室」「浴場」「宴会場」などの機能を分散的に配置し、まちぐるみで宿泊客をもてなす取り組みである。

従来型のホテルが縦に伸びるビルに機能を集約したものと考えると、「まちやど」は地域に水平的に機能を散りばめたものと言える。三重県でも、伊賀上野の城下町に点在する歴史ある邸宅をリノベートした分散型ホテルが既に開業している。

「まちやど」のコンセプトは、イタリア発祥の「アルベルゴ・ディフーズ」の考え方に影響を受けている。この取り組みは、1980年代に、北イタリアの小さい村を復興するためのプロジェクトとして登場した。

「まちやど」や「アルベルゴ・ディフーズ」は単なる分散型ホテルという機能ではなく、その土地に根付く人々のライフスタイルや、文化・歴史といったものを積極的に観光資源化しようとする点に特徴がある。そのコンセプトの根底には「持続可能性」があり、その地域に「既にある」資源に光を当てる取り組みとも言えよう。

筆者は、この考え方に共感するものの、地方の「ライフスタイル」という文化的資源の存在可能性を懸念している。もともと、日本各地には個性的な生活文化が存在している。土地ごとの個性に対する求心力は高く、ご当地メニューや、県民性を強調するテレビ番組が人気を博することはその裏付けとも言えよう。

一方で、実際に地方で生活していると、インターネットやスマートフォン、大型ショッピングモールの立地、ECなどの普及により、もはや情報やモノの購買に困ることはなく、土地ごとのライフスタイルの違いは認識しづらく、同質化が進んでいるようにも感じる。地方での生活の利便性が高まっていることは好ましいことであるが、「地域に根付く昔ながらのライフスタイル」という個性が見えづらい状況は、「まちやど」「アルベルゴ・ディフーズ」などが目指す方向と整合しない。

今後、住民として地方での生活環境を維持していくためには、エリアの稼ぐ力の向上が必要で、観光振興は重要な位置づけとされる。観光業を支える資源には「自然」「文化」などに加えて「住民」も含まれることから、住民自らが、地域の文化的背景や歴史を語り継ぐことを意識し、「古き良き」価値を現代的なライフスタイルに組み込みながら地域の文化を育む視点も重要だろう。「地域への愛着」をきっかけに観光資源が育まれる構造を理解することで、居住地や観光地としての地域の価値は高まるはずだ。

(コンサルティング事業部 調査グループ 主任研究員 中村 哲史)

中部経済新聞「経済レーダー」 2022年1月14日